左ききのわたしのちょう戦

一宮東部小・４　竹野　新知花

わたしは左ききだ。

えんぴつも、はしも、ボール投げも、全て左手でやっている。生まれてからずっとだ。こまったことはない。字もそれなりに上手に書けるし、みんなにも、

「にっちゃん、字がうまいね。」

と言ってもらえる。字を書くことは好きだし、漢字ノートもいつも花丸だ。字を書くことは、わたしのとくいなことだ。とにかく、生まれたときから、左ききでこまったことはなかった。これまではなかったのに、三年生のときにこまったことが起きた。それは、習字のじゅ業だ。習字は筆で書く。止め、はね、はらいがある。習字のじゅ業だけは、右手で書かなければいけない。今まで左手で書いてきたのに、急に右手で書くなんてできるわけがない。初めて右手で書いた字は、はずかしいくらいへただった。くやしくて、いやすぎてわたしはかなり落ち込んだ。父も母も、こうはげましてくれる。

「左ききなんだから、右手で書けなくても当たり前だよ。気にすることはないよ。左手でうまいんだからいいじゃない。」

分かっている。それでもどうしても書きたいんだ。左手で書くみたいに、右手で上手に書きたいんだ。わたしは考えた。どうしたら右手で上手に書けるか、うんと考えた。

「習字教室に通おう。」

それから、習字教室に通うことにした。右手で上手に書けるように、特訓することにした。やってみたら、やっぱりとてもむずかしい。わたしは右手で書くと、左手より三倍の時間がかかる。手に力が入らないから、手がぷるぷるふるえてしまう。それでも一生けん命がんばって練習した。こう筆を練習し始めてから九か月、右手でもだんだん上手に書けるようになってきた。母は、

「すごいなあ。できなかったことも、やり続ければ、こんなに上手になれるんだね。」

とほめてくれた。わたしはとてもうれしかったし、ほこらしい気持ちになった。やり続けてよかったと思えた。

四月から、筆で書くようになった。こう筆よりも、もっとむずかしくなる。手のふるえが筆に伝わり、そのままふるえた字になってしまう。何度書いても、字は細くゆれ、よわよわしい字になってしまう。大失敗だ。わたしは何度も何度も書いて、たくさんたくさん失敗した。気づけばわたしの横には、失敗作の山ができ始めた。

「ああ、また失敗。どうして上手にかけないの。」

と、とちゅうからいかりの気持ちがわいてくる。そうなると、もっと字がうまく書けなくなる。いかりの気持ちが伝わって、字はゆれ、はねはうまくいかず、バランスの悪い字になってしまう。そんなときは、深こきゅうをして、おなかにぐっと力を入れる。半紙とお手本を交ごに見ながら、右手の筆をすっと動かす。あせった気持ち、いかりの気持ちを心から追い出して書き進めると、自分でも、「これは上手だな。」と思える字が書けるようになってくる。習字のときだけは、右手で書いた字は、左手で書いた字よりも上手になる。わたしの筆で書いた字は、「ただ書いた字」と言うことではなく、「でき

なかったことを乗りこえて書いた字」なのだから、よけいに上手だなと思える。

わたしの目標は、右手で書いた習字で、入しょうすることだ。いつかそんなときが来たらいいなと思う。左ききのわたしが、右手で書いた字で入しょうするなんて考えただけでわくわくする。書けなかった字がすらすらと書けるようになるのは楽しいし、おもしろい。毎日こつこつと続け、努力した時間は、必ず自分の力になる。やり続ければ、できるということを、これからわたしがしょう明していきたい。

5・9